

小学生の漢字力の実態（漢字テスト） 調査結果 全体まとめ

漢字テストでは、小学1年生～6年生の配当漢字1,006字について、それぞれ1つまたは複数の読み方（音読み・訓読み）で問題を出題し、その漢字を書くことができるかを調査している。

各学年の配当漢字について、その次の学年の児童・生徒が解答している。

●全体結果

表1は、各学年で出題した問題の正答率・誤答率・無答率の全体結果を示したものである。

表1 漢字の正答率・誤答率・無答率（全体、平均、2013年）（%）

	全体	小2生	小3生	小4生	小5生	小6生	中1生
正答率	59.0	61.5	60.9	57.1	58.2	56.4	61.6
誤答率	25.2	21.5	25.5	25.5	24.8	26.8	25.9
無答率	15.7	16.9	13.6	17.4	16.9	16.9	12.5

※ 「小2生」は「1年生で学習する漢字」の結果、「中1生」は「6年生で学習する漢字」の結果を示している。他の学年も同様。

これをみると、正答率は、全体では59.0%であり、学年別にみると、小2生～小6生にかけて低下傾向で、中1生では再び上昇している。

誤答率は、全体では25.2%で、学年別にみると、小2生が21.5%とやや低く、小3生～中1生は25%前後である。

無答率は、全体では15.7%で、学年別にみると、小3生と中1生がやや低い。

正答率が約6割と低い主な原因は、漢字の配当学年では習わない読み方でも、小学校6年間で学習する読み方は、漢字配当学年の問題として出題しているためである。無答率が15%前後であるのも、その影響があると思われる。

また、小4生～小6生で正答率が低下するのは、既習の漢字数が増え、字形の似た漢字も増えることで、漢字を正確に書くことが難しくなるためだと思われる。

●誤答傾向

漢字テストの採点においては、13の誤答観点から正誤を判断している（P.3参照）。

各学年の誤答傾向をみると、すべての学年で「同音異字」による誤答がトップで、特に小5生～中1生はその比率が高い。学年が上がるにつれて、既習の漢字数が増えるためだと思われる。

また、小2生～小4生は、「出る・出ない・くつつく・くつつかない」や「点・線の向き、長さが不正確」など、漢字の細部が正確に書けていない誤答の比率が高い傾向にあり、漢字の字形や漢字を書くことに慣れていない様子が見える。小4生～小6生は、「点画の不足・過剰」や、「類似字形」「その他（字形のミス）」などによる誤答の比率が高い傾向にあり、画数が多い漢字や字形の似た漢字が増えるためだと思われる。

なお、1つ1つの漢字に注目すると、訓読みになじみがある漢字を音読みで出題したり、同じ漢字でも訓読みがいくつかある漢字は正答率が低い。児童・生徒の生活においてなじみのうすい読み方の場合に正答率は低くなっている。